

秋野 淳一 提出 学位申請論文

『都市祭りの宗教学 ―戦後の地域社会の変容と神田祭―』 審査要旨

### 論文の内容の要旨

本研究は、東京都に位置する神田神社の祭礼である神田祭を分析することで、戦後の地域社会と祭礼との関わりを明らかにしようとする試みである。近年、大都市を中心に、伝統的な祭りへの関心が高くなっていることがわかっている。なぜ大都市において、都市祭りが盛んに行われているのかを考察することで、現代日本人の伝統的な宗教に対する新しい意味や役割を明らかにすることを目的とするものである。なお、筆者が研究上の理由から「都市祝祭」ではなく「都市祭り」の用語を用いているために、以下この用語を用いて記述する。

本論は、考察の中心となる第一部、第二部、そして結論、さらに付論が加えら

れ、最後に資料編が付される構成となっている。

第一部の研究史篇は二章構成で、戦後の神田祭研究の意義を明らかにしようとしている。第一章「都市祭りの研究史と課題」では、都市祭りの研究史と課題について明らかにしている。都市祭りに関わる理論的な研究を概観した上で、秩父祭・川越祭・祇園祭・天神祭・神田祭といった伝統的な都市の神社祭礼、神戸まつりや浜松まつりといった行政主導型の祭り、高円寺阿波おどり・高知のよさこい祭り・札幌のYOSAKOIソーラン祭りといった新しい祭りに至るまで、都市祭りごとに研究史の整理を行っている。

研究対象に関する先行研究を扱う場合に一般的なのは、宗教学・宗教社会学、人類学、社会学、民俗学などの複数の学問領域ごとにこれまでの研究成果の蓄積と傾向を概観することである。筆者が学問領域ごとではなく、都市祭りごとに整理を行ったのは、ひとつはそれぞれの特徴を把握して他の都市祭りとの共通項と差異を読み解くためであり、いまひとつは、都市祭りの変化を複数の研究から把

握するためである。筆者の整理によって明らかになった課題は次の七点である。

第一、都市祭りを分析対象としながらも、大都市の都市祭りを対象とした研究が少ない。

第二、同一の都市祭りを継続的に調査研究し、先行研究の分析結果と比較検討を行い、その経年的な変化を実証的に明らかにした研究はわずかである。

第三、同一の都市祭りに限らず、他の都市祭りとの比較検討が充分になされていない。特に、伝統的な神社祭礼と新しい祭りとの研究間の実証的な比較検討の必要性が存在する。

第四、都市祭りが地域の現状に則した新しい町内共同の確認の場になっているという視点を持つ研究が少ない。

第五、個人と都市祭りとの関係を分析した研究が充分に進んでいない。特に、個人と都市祭りの盛衰の関係、宗教者個人と都市祭りの関係についての蓄積が不足している。

第六、祭りの非日常性が希薄化しているという指摘がある中で、個別の都市祭りにおける非日常化する要素や場について具体的に把握する必要がある。

第七、メディアへの取り上げられ方など、情報化と都市祭りとの関係について、ほとんど実証的な研究がなされていない。

筆者は、こうした都市祭り研究における課題、とくに第一と第二の課題を克服し、都市祭りの盛衰を実証的な分析によって明らかにするためには、東京の神田祭を研究対象とすることが重要であると指摘している。神田祭には、昭和四三年の藪田稔の調査、平成四年の松平誠の調査など、複数の研究が存在している。調査項目も統一されて、実証的な経年的変化の把握が可能な条件が整っている。また神田祭には、第三から第七の課題についても、検討が可能な具体的要素を見いだすことが可能であると指摘している。つまり、第三の課題としては「元祖女みこし」の参加者、第四の課題としては蔭祭と町会の年中行事、第五の課題としては神職・町会の特定の個人・「元祖女みこし」の参加者など、第六の課題として

は神田神社への宮入参拝、第七の課題としては複数のメディアによる神田祭の取材の実態である。

第二章「神田祭の変遷と研究の課題」では、神田祭の発祥から始まり、近世、明治期から戦中まで、そして戦後と分けて、神田祭の変遷を概観している。

神田祭の発祥から平成二年の神田祭までは主に『神田明神史考』の記述をもとに神田祭の変遷を概観しているが、一〇年振りに行われた明治一七年の神田祭において江戸期よりも多い四六番の山車を勢揃いさせたこと、明治一七年の神田祭で暴風雨の被害によって山車の運行が困難になると、新たに町神輿を誕生させ新しい祭りのスタイルを作り上げたこと、さらには関東大震災、第二次世界大戦で繰り返し中断したにもかかわらず、戦後の昭和二七年には戦後第一回の神田祭を行い、鳳輦による神幸祭のほか、新たに神田神社への町神輿の連合宮入を開始したことなどに注目してまとめられている。筆者は、社会の変化に対するひとつのリアクションとして祭りが盛んになっている側面を確認している。

第二部の個別分析篇は二章構成で、戦後の地域社会の変容と神田祭の関係について考察を行っている。

第三章「戦後の地域社会の変容と神田祭五〇年の盛衰」では、神田祭の現状を示した上で、隔年で行う神田祭における蔭祭、町会の年中行事における神田祭、神輿を女性の担ぎ手に特化させた須田町中部町会の神田祭に注目し、地域社会の変容と経年的変化の関係を複合的に把握するため、五節に分けて考察を行っている。

第一節・第二節では、昭和四三年に実施された藪田稔の調査、平成四年に実施された松平誠の調査結果のその後を把握するために、平成二五年（東日本大震災により四年振りの開催）と平成二七年（神田神社御遷座四〇〇年奉祝記念大祭）の神田祭について実態調査を行っている。

調査の結果、金曜日の祭りの拡大、平成六年の秋葉原中央通りの「おまつり広場」の開始、須田町中部町会の「元祖女みこし」や紺屋町南町会の段ボール神輿

の誕生、岩本町二丁目岩井会の「桃太郎」山車の展示に伴う神酒所の二〇年振りの設置など、町会の居住人口が減少し、町内の祭りの担い手の確保が困難になるといった社会的状況にもかかわらず、祭りが活性化している事実を確認している。

第三節では、観客がほとんど存在しない神田祭の蔭祭の役割の解明を試みている。蔭祭が企業との懇親の場や他町会との相互乗り入れ、新住民の参加の機会など、新たな町内共同の場になっている点を明らかにしている。第四節では、町会の年中行事の変容と神田祭の関係から、町会にとって神田祭が最大の行事になっている背景を考察している。第五節では、町会の神輿を単独で女神輿にして連合渡御や宮入参拝を果たす「元祖女みこし」の街の神田祭について考察している。参加者を一般募集する「元祖女みこし」は、町内の金融機関の減少により、神輿の担ぎ手を「社縁」（会社社縁）から「選択縁」に移行させて、参加者の維持・拡大に務めるなど経緯を明らかにした。

第四章「個人と神田祭」では、個人の活躍（人的要因）に着目し、神田神社の

神職、町会の特定の個人、神田祭の「元祖女みこし」を担ぐ不特定多数の個人の視点から三つの節に分けて、個人と神田祭の関係を考察している。第一節では、これまでの都市祭りの研究において、ほとんど注目されることがなかった神職（宗教者）と都市祭りとの関係、第二節では、町会の特定の個人と神田祭の関係、第三節では、不特定多数の個人が集う「元祖女みこし」の参加者の実態を明らかにするとともに、高円寺阿波おどりやよさこい祭りなどの新しい都市祝祭との共通点と差異を明らかにしようと試みている。

結論では、第一部・第二部の分析を踏まえて、都市祭りの拡大につながる四つの特徴、①「都市祝祭と町内の祭りの複合構造」、②「結集のための核の存在」、③「個人の活躍（人的要因）」、④「非日常化するイベント」を挙げて、都市祭りの宗教性について考察を行っている。

①「都市祝祭と町内の祭りの複合構造」は、観客の多い神田神社への宮入参拝や連合渡御の魅力が、神輿の担ぎ手の動員を維持・拡大し、町会の神輿巡幸を支



えている構造を指している。②「結集のための核の存在」は、①で指摘した都市祝祭の要素と町内の祭りの要素をつなぐ結集のための核として、町会の祭礼の象徴（神輿や山車など）、町会や地区連合で祀る小祠の存在、神田神社の存在があることを意味している。

③「個人の活躍（人的要因）」は、②で指摘した結集のための核の強化にも関わる、町会の特定の個人、神田神社の神職、都市祝祭に参加する個人の活躍のことを指している。人的要因が神田祭の盛衰を考える上で重要な鍵となっているという指摘である。

①「非日常化するイベント」は、神職という個人、そして町会役員・関係者などの特定の個人にとっては祭りが観念的であっても共同性の確認の場になっていることから「非日常化する祭り」（祭儀）であると考えたいという視点である。現代の神田祭が盛んであるのは、神田神社神職と町会の特定の個人が活躍すること（人的要因）によって、神田神社や祭礼の象徴といった結集のための核の聖性

が強化され、都市祝祭と町内の祭り（祭儀）をつなぎ、不特定多数の個人が祭りの担い手や観客として集う賑わいの場を生み、非日常化するからであると考察している。特に筆者は、人的要因と神田神社・祭礼の象徴の存在が大きいと指摘している。

こうした神田祭の分析結果を踏まえて、筆者は、隆盛する現代の都市祭りは、個人が結集のための核を媒介として賑わいを形成し、非日常化することによって一時的な共同性や擬似的なコミュニティを味わうことのできる社会的な装置といえるのかもしれないと分析している。

付論では、大都市の都市祭りの参考事例として、現代の東京・渋谷の金王八幡宮の祭りを対象として、SHIBUYA109前で行う神輿集合の意味などについて、地域社会との関係から考察を行っている。また、渋谷の小さな神々に関する考察も行っている。

資料篇では、平成二五年と平成二七年の神田祭の祭礼実施状況を示す町会ごと

のデータが掲載されている。

### 論文審査の結果の要旨

本論は、都市祝祭を宗教社会学的視点から考察しようとする試みである。「祭り」に関しては、民俗学、歴史学、宗教学において数多くの研究成果が蓄積されてきた。都市祝祭に関しても、宗教学、民俗学、人類学、社会学において成果が見られるが、事象が持つ現代的意味と比較して、十分とはいえない状況が続いている。

本論は調査研究に基づく考察であるが、調査が広範囲かつ長期間にわたって行われた成果であることは十分に理解できる。神田神社の氏子区域は百八ヶ町で、神田地域から日本橋にまで広範囲にいたる地域である。すべての町会が同じ密度で調査されているわけではないが、神田祭を把握する上では十分な地域をカバー

していると考える。また、分析に反映されているように、長期間にわたる町会や神田神社との交流をうかがうことが可能である。

以上のような調査方法は調査内容にも関わりを持っている。通常、神田祭といえば、町会神輿の宮入や連合渡御を行う本祭りをまず調査することになる。筆者は、陰祭りをも調査することで、町会や神社にとってどのようなサイクルで祭りが地域社会と関わっているかを明らかにしている。

町会の年中行事に関する調査も、意味づけとしては神田祭からみた町会ではない。地域社会としての町会にとっては、神田祭も地域生活のうちの一部である。地域社会と祭りとの関わりが、大規模な祭りである神田祭に集約されずに、町会からも相対化されて理解されている点は興味深い。

神田祭の氏子区域が神田地域から日本橋までに広範囲に及んでいるが、各氏子区域の総代はその地区を代表する老舗の代表者や企業経営者が圧倒的に多い。これらの人物に複数回にわたって、しかも丁寧インタビューを行うことができた

のは、神田神社の関係者としての立場をとりえたからである。筆者は、神田神社（神職）による調査の受け入れを十分に調査に役立てている。ある意味で神社の内側からみた祭りや町会は、単なる参与観察を十分に超えている。

神田祭研究のもっとも大きな特徴は、地域社会と祭りの経年的変化を分析することができるところである。藪田稔が昭和四三年に実施した調査、そして平成四年に松平誠が実施した調査をもとにして、地域社会と祭りとの関わりの変容を理解できる可能性が存在する。本論では第二部、とくに第一節「昭和四三年～平成二五年の神田祭の盛衰」が中心的な部分となる。

筆者は藪田の調査結果を次の三点に要約している。一、御神霊のシンボル移動が巡回区域の宗教的浄化という象徴的効果を持つこと、二、「練り」行動には集団的沸騰が期待されていること、三、祭りの基礎集団が町会であることである。また、松平の調査結果についても、一、女性の登場、二、町内会以外の人々の存在、三、神輿同好会の存在を挙げている。その上での筆者の結論は、「なぜ戦後

の地域社会が変容する中で大都市・東京の神田祭は盛んになっているのか」問いに答える形で四つを明らかにしている。それは、都市祝祭と町内の祭りの複合構造、結集のための核の存在、個人の活躍、非日常化するイベントである。

詳細な調査結果を基にした、上記の四点の抽出はそれなりに説得力を持つものである。他方で、今一度本論文の主旨を思い返せば、戦後の地域社会の変容と神田祭との関わりを明らかにすることであった。地域社会の変容が意識されているとはしても、関心は「祭り」に偏っており、藺田や松平が残した調査結果を基にした社会変動と祭り（神社）との関わりに関する分析は十分とはいえない。この点は今後の課題としてよりいっそうの展開が望まれる。

以上述べてきた所見には本論文に対する少なからぬ問題点が含まれているが、それは決して本論文に対する評価を落とすものではない。今後ますます重要なテーマとなるであろう領域に、はっきりした問題意識をもって臨み、成果を上げた点は十分に評価されてしかるべきである。

以上の審査結果をもってすれば、本論文の提出者秋野淳一は、博士（宗教学）の学位を授与せられる資格があると認めらる。

平成二十九年二月十五日

|    |         |      |   |
|----|---------|------|---|
| 主査 | 國學院大學教授 | 石井研士 | 印 |
| 副査 | 國學院大學教授 | 西岡和彦 | 印 |
| 副査 | 國學院大學教授 | 黒崎浩之 | 印 |





秋野 淳一 学力確認の結果の要旨

左記三名が各専門分野からそれぞれ学力確認の試験を行った結果、博士（宗教学）の学位を授与される学力があることを確認した。

平成二十八年十二月二十日

学力確認担当者

|    |         |       |   |
|----|---------|-------|---|
| 主査 | 國學院大學教授 | 石井 研士 | Ⓔ |
| 副査 | 國學院大學教授 | 西岡 和彦 | Ⓔ |
| 副査 | 國學院大學教授 | 黒崎 浩行 | Ⓔ |